

スペイン風邪の木霊

こだま



杉本忠夫
（虎の門病院 内分泌代謝科
非常勤嘱託医）

この数年秋から冬にかけて、インフルエンザ特に新型（変異トリ型）インフルエンザが時の話題になっております。今回はインフルエンザを酒林の酒肴にしてみたいと思います。

新型インフルエンザは一九一八年に大流行したスペイン風邪と同じ変異トリ型ウイルスです。スペイン風邪の流行時には、全世界で四千万人の犠牲者がでたといわれております。

当時の社会基盤は粗末で、医療も現在よりは貧弱であったことが、スペイン風邪の猛威に屈してしまった大きな

要因と思われます。

スペイン風邪の流行した時の記録に よりますと、前日まで元気に野球を楽しんでいた青年が風邪症状と高熱で、治療の甲斐もなくわずか数日後にスペイン風邪の犠牲者となつてしまつたと報告されています。

次の新型インフルエンザの大流行は一九五八年でした。この時は香港を中心としてアジアで大流行し、エイジア（アジア）フルー（風邪）とよばれスペイン風邪を体験した欧米人に非常に恐れられました。日本では香港風邪

とよばれたので、覚えておられる方も多いかと思ひます。このアジア風邪は医療の進歩、社会基盤の整備がスペイン風邪当時より進歩したこともあり、スペイン風邪流行時ほど犠牲者は出ませんでした。

そこで、インフルエンザウイルスについて少し考えてみましょう。インフルエンザウイルスの研究が盛んに行われておりますが、まだ不明なことがたくさんあります。

インフルエンザウイルスはシベリア地方で生まれ北から飛来する渡り鳥によつて運ばれてくることが明らかになっています。

ところが、このインフルエンザウイルスは渡り鳥からヒトには感染しませんが、しかし渡り鳥から、ニワトリなどの家禽類や、タヌキ、イノシシなど野生の動物に感染し、その体内でヒトに感染力を持つウイルスに変異するといわれております。

日本でもカラスから鶏に感染するといわれ、トリインフルエンザに感染し

た鶏の鶏舎周辺のカラスを駆除したことがマスコミに報道されました。

ところで、香港では大陸から鶏を多量に輸入しています。そこで、アジア風邪が流行後、香港政府は、鶏列車の監視を強め列車内で病気の鶏が一羽でも発見された場合、その鶏列車を止め鶏を全部処分しているほどです。

日本では、一九九八年に大流行には到りませんが、散発的にインフルエンザで高熱を出し数日で急に具合が悪くなった方がおられました。

その中の一人の方について経過をみてみましょう。元々元気な六〇歳の男性でした。日曜日に風邪をひかれ、月曜日は体温が三七度でした。真面目な方で、総合感冒薬を内服しながら勤務に出かけられました。火曜日には三八度以上がり、翌日は勤務中に体がつらいため早引きをして帰宅されました。その後体温は三九度と上昇し、木曜日には体が動かせず、体温は四〇度にもなったため、金曜日に緊急入院されました。

顔は憔悴し、体温は四〇度、胸部X線写真では右肺全部が肺炎でした。そのため人工呼吸器を装着しましたが、治療も及ばず入院三時間後に帰らぬ人となられてしまいました。

通常、片肺が健全で、他肺が肺炎の場合はこのように電撃的な経過をたどることはまずありません。そこで、家族にその旨をお話し、病因解明のため病理解剖させていただきました。

そして、この解剖所見で驚くべきことが判明しました。入院後の三時間間に健全だった左肺も右肺と同じ肺炎になっていたのです。この肺炎所見はインフルエンザ肺炎に特異的な、肺に出血する重症の出血性肺炎でした。

すなわち、この方の肺炎は、スペイン風邪、香港風邪の肺の所見と同じ両側性出血性肺炎だったのです。入院時は左の肺は健全でしたが、入院後もなく、右肺と同じように出血性肺炎に罹っていたのです。そのため人工呼吸器で酸素を送っても肺に出血した血液が充盈しているため、酸素が肺の中に

送り込めず呼吸不全に陥ったのです。

このように一連の経過から一九一八年のスペイン風邪、一九五八年のアジア風邪、一九九八年に日本で少し流行したインフルエンザ（出血性）肺炎と、ほぼ四〇年サイクルで新型ウイルスが波状攻撃を仕掛けているように見えます。幸いにも医療の進歩と社会基盤の整備がその犠牲者の数を激減させておられます。

また、新型インフルエンザの予防対策も進歩しています。その最善策である、予防ワクチンも安全で有効な新型インフルエンザ用ワクチンの開発が進んでいます。

新型インフルエンザ対策はこのよう進行しております。四〇年サイクルで流行すると予測される新型インフルエンザは二〇三八年にはシベリアの凍土に埋もれたままかもしれません。

今年インフルエンザA・B型ワクチンでインフルエンザA・Bに罹らないようにしましょう。

ダリア

中西美子

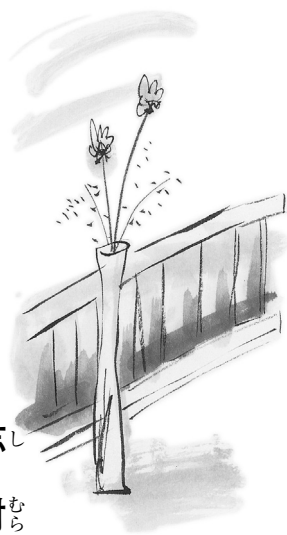


最近、ダリアが流行っているようです。季節になると花屋の店先に華やかな彩を添えます。

私がダリアにもついイメージは、いわゆるさくらの仲間とやや軽視気味でした。山野草や茶花の趣とか、薔薇や百合、蘭のような高級感がないので、いつの間にか偏見が出来ていたのです。最もダリア園とか言うものがあるのだからそれ相応な花で、種類も多く、美しいものなのでしょう。

見たことは、ありませんが、皇帝ダリアにおいては、二メートルにもなるそうです。ダリアの逞しい茎は、大きな重い花を支えるためのものなのでしょう。切花で売られる物は、大輪で、鮮やかな色、幾重にも重なる花びら、一片一片にボカシが入っているもの、エンジ色のシックな色合いのもの、いろいろな要望に答えてくれます。立派に主役を張れるアイテムなのです。鉢物も種類が豊富で長く楽しめます。

同人雑誌と文学の魔力



志し村むら有くに弘ひろ

（文芸評論家・
相模女子大学名誉教授）

「図書新聞」の同人雑誌評を担当するようになってから、長い歳月が流れた。

私の担当月になると、新聞社から百冊くらいの同人誌が送られてくる。その中から取り上げる作品を選定してゆくのだが、枚数に制限があるため（五、六枚程度）、前に取り上げていたものでも、あとから読んだ作品でこれは外せないと思うと、前に書いておいたものの中から削除することになる。私はこ

れを切り貼りとかバッチワーク方式と称しているのだが、削除するとき「せっかく書いたのに……」と、いつも残念に思う。

「図書新聞」の同人雑誌評がスタートしたとき、文芸評論家の保昌正夫（故人）もメンバーのひとりであった。保昌は二、三年経って、理由ははっきりとしなけれど、「これ以上無理をしてはいけない」と言って、この仕事から

手を引いてしまった。多忙であった保昌は、多くの作品に目を通すことが時間の上からも苦痛になっていたのかもしれない。同人誌にはさまざまな形態のものがある。小説・戯曲・詩・短歌・俳句・評論・随想と全てのジャンルの作品を掲載しているもの、研究論文・詩・歌・俳句など専門分野のものだけを掲載している雑誌もある。私は歴史小説・時代小説が好きなので、どうしてもこの手の作品を最初に読んでしまう。詩や短歌などでも古典や歴史を踏まえた作品がある。そのようなとき、伝承という観点から、私にはまことに得難い作品を読ませていただくことになる。

「久坂葉子研究」・「阿部知二研究」・「芥川龍之介研究年誌」などのように、一人の作家を研究する専門の研究誌に触れることがある。寺内邦夫らの「タクラマカン」のように鳥尾敏雄に関する貴重な資料、エッセイを掲載している雑誌もある。また、郷土史家の貴重な労作に出会うこともある。私が同人

雑誌評から足を洗うことができないのは、同人雑誌特有の貴重な文学・歴史資料を発見することができるからである。だから、私にとって同人雑誌はいつも新鮮である。

私は、ここ二、三年のあいだにいくつかの学会に退会届を提出した。会員である以上、出席する義務がある。それが苦痛なのである。また、学会に出てゆけば、何人かの知人と顔を合わせることになる。それも億劫なのである。とはいえ、気の小さい私は、退会するにもそれなりの勇氣と決断を要し、躊躇逡巡しながら退会届を書くのである。

ところで、「週刊読書人」の同人雑誌評は、評論家の白川正芳が頑張っているようである。以前から白川が「読書人」で同人雑誌評を担当しているのは知っていた。そうであるのに、「いるようである」などと無責任な表現をしたのは、たまたま最近、「読書人」に寄稿したところ、白川の同人雑誌評が載っていたので、「頑張っている」と思ったのである。「文学界」の同人雑誌評がな

くなったことで、同人雑誌の多くの書き手がショックを受けた由の記事を読んだ。同人雑誌の書き手を刺激・鼓舞するという点で、確かに「文学界」の同人雑誌評の存在意義は大きかった。

しかし、「文学界」の同人雑誌評が中止されたとしても、どうであれ、同人雑誌そのものは決して消滅することはない。「文学界」の同人雑誌評は「三田文学」に継承されるらしい。

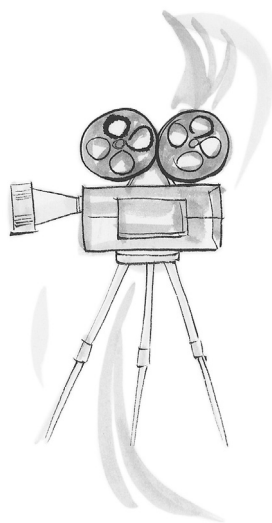
同人雑誌は、自分が書きたい作品だけを発表できる利点がある。それは、出版社（編集者）の意向とは無関係な世界である。ずっと以前、「文学界」同人雑誌評を担当していた林富士馬は、根っからの同人雑誌ファンで、いつも何らかの同人雑誌にかかわっていた。

林と親しかった私は、林と二人だけの同人雑誌を作ろうかと真剣に考えていた時期があった。だが、その思いは林の死によって途絶えてしまった。

今は昔のことである。私は宮本瑞夫（近世文学研究者）と同人誌の発刊を企画した。そのとき、その「かたり

べ」と命名された同人雑誌に今川徳三・大泉滉（故人・俳優・随筆家）・小野孝二・花村獎などが参加してきた。小野は、生前、多くの倶楽部雑誌に毎月のように作品を書いており、花村はかつて直木賞候補になったことがあるプロの作家であった。井口朝生（山手樹一郎の息子）は他界するまで、重門冬二と同人誌「時代」を出しており、福田清人は晩年に同人誌「日曆」に参加し、晩年の城山三郎も同人誌に作品を書いてきたように記憶する。最近、第七期「九州文学」第二号で、麻生富久男の「残燭」と題する、明治・大正・昭和の三時代を舞台とする、規模雄大な作品を読んだ。麻生は原田種夫・火野葦平の推薦で第二期「九州文学」同人となった人で、現在八十八歳、不自由な目で二百六十七枚の長編小説を書き上げたという。こうしたところに文学の魔力を感じるのだが、ともあれ、同人雑誌は文学する者にとって、やはり一つの原点、心の拠り所であるらしい。

「強い個性」



志村栄守
(評論家)

スクラップをめくっていたら、こんな文章が目についた。

ペンを執らせるのは、ここに現代という時代の特徴をすこぶる鮮明に見る思いなのかも知れない。

欧州系のある映画監督を評してこうあった。「――『荒野の用心棒』を経て、後に『ワンス・アポン・ア・タイム・イン・アメリカ』などで、アメリカとアメリカ映画に対する複雑な思いを独特なスタイルにまで昇華させた男」。

もし、この監督が生きていてこれを読んだとしたら、苦笑して……あとは黙して語らなかつたか――等が目には浮かんだ。

後者の三時間半の大作は何度も見た。

今後、こんな映画は作られることはないのでは、と思わせる稀有な映画だと思っている。

とりあえずそれは脇に置くが、「――に対する複雑な思い」と「独特なスタイルにまで昇華」という箇所に、とりわけ強く現代あるいは現代人の精神性を象徴的に、あまりにも典型的に感得した。

つまりここに時代そのものを読む気がしたのであって、個人云々ということではないことを断っておく。

すなわち引用した二つの表現だが、いかにも現代人好みのカッコ好さを感じさせないか。字面にしろ、文章の流れにしろ、みごとにまでにキマッてい

る。

しかし、問題はその先にはないか。あらためてよく見ると、「複雑な思い」とは？。「独特なスタイルにまで昇華」とは？と。枚数の関係で文章はこのような表現をとらざるを得ない場合は多々あることだが……。

ともかく、ここに時代の特徴を露骨に見る思いがするのだ。スタイリッシュな文章の流れは気持ちいいとしても、その流麗な表現が実は抽象に終始する――ここところだ。

さて、あの映画監督の作品だが、このように見たとしたら曲解か。この人はかなり長期間、時代の求めに応じて欧州的な西部劇を作り、話題となりま

た評価も得た。今以て懐しく思い出すファンは多いと思われる。

ところがそれが実は、商業主義に乗って、自分の信念とはやや違った仕事であったことが分かる時がやって来る。最後のあの長篇はそれまでの西部劇とはまったく異質で、その芸術家としての資質の高さが私達を驚かせた。

制作者のA・ミルチャン氏から潤沢な資金を調達し（これは想像だが。この人は莫大な資金を有するとか）、さらに私財も投入したのではなからうか。その思いのすべてがあの映画に注ぎ込まれたと見えてならないからだ。

ちなみに芸術的資質の一面には、すべてを投げ出しても自らの信ずるところを世に送り出したいとするとところがあっている。あの映画こそその意味で、耐えて耐えて具現した芸術家の魂の結晶だったのであり、まさに完全燃焼そのものだったことだろう。

「二十一世紀最大の映像巨篇」と当時のキャッチコピーが謳ったが、宣伝広報の感性にこちらには監督も微苦笑を返したかも知れぬ。

それにつけても気になるのは、昨今

の洋画が、舞台が地上であれ宇宙であれ、歴史上であれ未来社会であれ、主人公をヒロイックに描く、この傾向に偏り過ぎることだ。現代人は個人のカット良さ、あるいはその周辺に美学を構築して感動し、感動とはこのことだとばかりに固執し過ぎるのではなからうか。

あの映画では、屋上に大きな木樫のある風景とか、巨大なブルックリン橋を背景に少年時代の主人公達が颯爽と裏街を行くシーン等々、往年のマンハッタンの場末、つまりこの世と人間の運命の交錯という基本的な構図が意識されている（と思ふ）ところが実にいい。

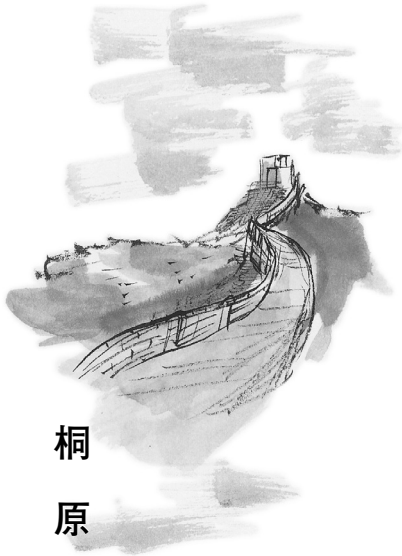
そこに横溢するのは、運命的な個性が各様に花開き、やがて閉じて行くこの人生の赤裸々な真相、それは華麗でもあり悲惨でもあるのだが、この映画は不思議にも印象としては監督が長年、心に温めてきたこの人生への讃歌と映る。つまり、友情とか人としての信義を見る古典的な感動と合わせ、生きる喜びという普遍的な歓喜、この人は映画人という天職を生かしてこれを示したかったのだ、と。

さてここで話は少し翻るが、仮りにその時代の世相がどのようなものであれ、この社会と人間という関係にはあるパラドックスが潜む。しかもこれが意外に看過されるのだが、あの小林秀雄を当時、斯界の頂点にまで押し上げた怖るべき（畏るべきか）それなのだ。「社会のあるがままの錯乱と矛盾とをそのまま受納する事に堪へる個性を強い個性といふ」。

若い時の『Xへの手紙』で箴言めいてこう書いたが、自らに言い聞かせているようでもある。ここに小林とその周辺、つまり社会との関係が浮上する。ところがこれが良識を逆撫ぜするかのようで始末が悪い。そんな私達の躊躇を先読みするかのようには!? 決然とこう念を押している。「言い代へれば社会に負けなければならぬ」。

ただ、小林のこの「社会」は、後に『私の人生観』で、こう書くところの「現実」と限りなく接近して見えること、これが謎を解く鍵のようだ。「現実畏敬の念のない人には、決して現実とは与へられない」と。

拳さんの字



桐原良光

(文芸評論家)

拳さんの字は、味わいのあるいい字だった。温かみのある独特の字だった。その人柄を思わせる闊達な字だったと思う。

昨年十月五日、緒形拳さんが亡くなった。享年七十一歳は少々早すぎた。「栖山節考」「復讐するは我にあり」の名演技はご存知の通りだ。善人を演じても超のつく悪人を演^やつても実に存在感のある俳優だった。大河ドラマ「太閤記」

で秀吉を演じたのは、ほんのちよつと前のことにも思えるが、もう四十数年も前のことなのだ。あの秀吉のニンマリとした笑顔は忘れられない。

そんな拳さんと旅先で一緒になったことがある。拳さん、なんて気軽に呼べる関係ではないのだが、拳さんにはそんなことを許してくれそうな空気がある。

一九九一年七月、ぼくらはTBSの

大型ドキュメンタリー番組「万里の長城」を取材中の拳さんら一行に合流した。西安のさらに遙か西北方千キロ以上になる酒泉の街だった。新聞社にいたばかりは、番組制作過程を取材するということで招かれて出かけていった。先行していた拳さんは、後発のTBSスタッフが差し出した日本のトイレレットペーパーを嬉しそうに抱えてホテルの階段を上っていった。たらし込むような笑顔、と拳さんの笑顔を評した人がいたが、まさにそんな可愛らしいとも表現できる笑顔だった。当時の中国は、まだ観光客を迎えるには十分な体制ではなく、ビールは冷たくなかつたし、北京空港のトイレでさえ鍵がなかつたし、トイレレットペーパーも上等とはとても言えない代物だった。日本のトイレレットペーパーは貴重品だった。

拳さんらは、前年一月の長城東端から断続的に取材始めていた。リポーターとして参加していた拳さんは、広大な中国、長大な長城に戸惑いながらも庶民と話を交わすことで理解を深めよう

という姿勢を保ったようだ。ぼくらは、長城取材の最終場面近くで合流しただけだ。長城の西端といわれた黄河上流、北大河の切り立った断崖近くの嘉峪関近辺で取材する拳さんを追った。

拳さんは、酷暑の中、今にも崩れそうな長城の上を歩きながら「血が透き通るようなこの風の音が聞こえますか」と突如マイクに向かった。ぼくも、砂漠の単なる熱風とは異なる太古から流れるような不思議な風を感じていたが、このように捉えた拳さんの感性に度肝をぬかれた。もちろん台本などなく、拳さんの胸奥から飛び出した言葉だった。そして、北大河を眼下にした絶壁の端に立った拳さんは「この河はまさに『砂の河』ですね、すごい！」と口にした。このあたりの黄河上流は、滔々たる流れというよりは、まさに刻々と大地を削り取っているという感じの黄濁した砂の流れであり、巨大な龍のようでもあった。瞬間的に『砂の河』と表現した拳さんに舌を巻いたものだ。

旅の仲間が、現地で中国人作家の書

の掛け軸を購入して自慢気に拳さんに見せたことがあった。少し斜めに走ったような流麗な書体だった。多分、安い買い物ではなかったのだろうが、ぼくの眼にはその書はお手本通りのようでそれほど面白みのある字には見えなかった。それを見た拳さんは、購入者の手前か、何も言わなかったが、複雑な笑顔を見せた。その笑顔が拳さんの批評だった。

拳さんの書は、自由闊達で八方破れのような、それこそ黄河の流れのようにエネルギーを充滿させたままに流れるようだった。太い筆で、楽しみながら書いたことが誰にでも分かるような字体だった。いわゆる『上手な』書の対極にあるような字だったが見ていただけで楽しくなるような字だった。

拳さんは、八年前から肝硬変を患い、五年前からは肝癌と闘っていたが、家族以外にはこれを誰にも知らせずに仕事を続けていたという。九月三十日に行われたテレビの連続ドラマ「風のガーデン」の撮影終了に伴って行われた記

者会見には姿を見せてマイクを握り、「舌応なく人つて老い、死が訪れるわけ……」と番組の完成を満足そうに語っていたのだから、それから僅か五日後の死に誰もが仰天した。肝癌による肝臓破裂だったと新聞にあった。

拳さんの訃報に、「書家・拳さん」に触れた新聞は、あまりなかったようだ。コラムで書いた新聞はあったが、「書家・拳さん」を知らない人が多いのではないかと思う。映画監督の山田洋次さんが十月九日の日本経済新聞朝刊文化面に追悼文を寄せ、藤沢周平原作の映画「隠し剣 鬼の爪」に拳さんが出演した時の秘話を、「亡くなった今なら、公表しても許してもらえらるだろうか」と明かしている。拳さんが素晴らしい字を書くことを知っていた監督は、映画のタイトルや宣伝に使う文字を依頼する。「何日か考えて、これが自分の字ということだれにも言わない条件で引き受けてくれた」というのだ。

実に、拳さんらしいと思った。

旅へ

五十を過ぎたら、広いアトリエで絵を描きながら友を呼んで酒を酌みかわしたり、とのんびりなんの心配事もなく暮らしてゆけるつもりであったが実に甘かった。

長男は十年前に家をでたつきり顔を見せず、私たちが留守の時やって来て、ワシの服やら、ストープや食い物、欲しい物を持ち出しているようである。この前はホンダライフを借りていったきり返しにこない。次男は数年前に学校を卒業して、なにをとち狂ったか、

佐川毅彦

ミュージシャンになるとエレキギターを買ったが、ワシは、ギターをひいたのを一度も見えていない。

以前三ヶ月ぐらいガードマンをしたのを最後に働かず、ワケのわからん本を一日中読んどう。

気がふれるのは時間の問題のようだ。

長女は高三の時、ワシの知らん男とかけ落ちして、行方不明である。

長女の友人の春子によると、二歳の男の子がいて、元気でやっているそうである。

沖繩に帰ると年とったジジババがおる。

財産を少々もっておるのだが、名義を書きかえてくれず金もビタ一文渡さんと。それなのにもっと親の世話をしろ、庭の草むしりをしろ、となりのジイサンの葬式にいつてこい、便所をきれいにしろ、フロ場を洗え、台所のゾーキングがけをしろ、部屋中をそうじ機かけんか、アレ買ってこい、これせんかと牛馬のようにこきつかうのである。

会うたびに両親は元気になり、かなり長生きするようである。

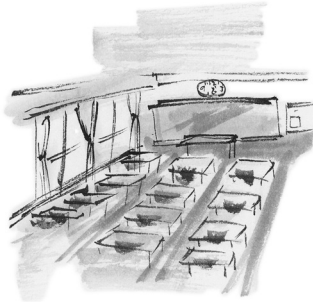
ワシの方は、去年は血をはいて一と月ばかり入院したし、その二年前は胸膜炎で二ヶ月入院。このままでと、あと何年生きられるだろうか。

冗談じゃない。やってられつか。親の貯金を全部降ろして、パンを買って、あるだけのお金をかきあつめて、絵の道具をつめ込んで、放浪の旅にでる事にする。

まず那覇港にいつて鹿兒島行きフェリーに乗った。いざ、さらばじゃ。



一九四五年秋、民主主義の始まり



片岡義男
(作家)

仕事の現場で、珍しく、久しぶりに、同世代の男性と知り合った。落ち着いたスーツにネクタイ、やや白髪のお紳士だ。見た目で年齢の見当は僕にはつけがたかったが、太平洋戦争に日本が大敗戦した年の四月に、小学校一年生になったという。大敗戦の直前だが、日本はまだ軍国主義の戦時下にあった。だから彼が入学したのは国民学校だ。そして、その年の夏に大敗戦があり、次の日から日本は民主主義でやってくるはずの国となった。この日本の民主主義という神話の創世を、くだんの紳

士は語った。

その年の夏休み前の残り何日かは、この紳士にとつては、戦後日本の初等教育の、いちばん最初の部分となった。そしてその延長としての、九月からの新学期を幼い彼は迎えた。

一九四五年の秋が深まるにつれて、日本の民主主義はその度合いを強めつつあった。敗戦前の、つまり戦時下の国民学校では、男子生徒と女子生徒とは別々だった、と彼は述べた。おなじ学校のなかで男女が別々のクラスに分かれていたのではなく、学校そのもの

が別々だったという。皇国の母の予備軍だった小学生の女性たちは、そして小学生だけではなく他の学年すべての女性たちは、男性たちとは別の学校に通って勉学にいそしんでいた。

一九四五年の秋が深まるにつれて、日本の民主主義はその度合いを強めつつあった、とたつたいま僕は書いた。そのとおりのことを、僕と同世代の紳士は体験した。ある日の朝、登校して教室に入ってみると、クラスの編成替えがなされていた。ひとクラスの人数は半分となり、残りの半数の席は空席だった。

どのクラスでもおなじことがおこなわれていたから、一年生がぜんたいで一組から三組まであったとすると、クラスの数は三クラスから六クラスへと、二倍に増えていた。いきなり半分も出来た空席はいつたというこなきだろうかと、坊主頭の小学生たちはその頭を捻った。

授業の開始を告げる鐘が鳴ると、男の上学生たちに担任の先生は次のよう

に言った。「民主主義の国となった日本では、男女共学が始まります。この学校でも男女が仲良く席をならべて、いっしょに勉強することになりました。いま半分だけ空いている席には、今日から女子生徒諸君がすわって、みんなとおなじクラスの友だちとなります。いまからその女子生徒たちが教室に入ってきて、席につきます。さあ、新しい友だちを、拍手で迎えましょう」先生は教室の前の引き戸へ歩いていき、その戸を開いた。アイウエオ順ですでにきめてある席順どおりにならんで待機していた女子生徒たちは、やや恥ずかしげに、とまどいはあるけれど嬉しさは隠しきれず、何人かは頬を紅潮させ、男子生徒たちの拍手を受けながら教室へ入っていった。そして先生の指図にしたがって、すでにきめてあるそれぞれの席にすわっていった。

「自分の隣の席にどんな女の子が来るんだらうかと、生まれた初めての、ほんとに興味津々の状態でしたよ」と、平成二十年の紳士は僕に語った。僕は

この紳士より一歳だけ年下なので、以上のような場面に身を置く幸運を体験していない。小学校に入ってみたら、そこには女子生徒と男子生徒とが、ほぼ半々にいた。僕も含めて誰もが平々凡々たる子供であり、女の子たちはひどく静かでおとなしく、あれが控え目というものだったのだろうか、彼女たちが自らなにかを提案したり行動を起こしたりすることは、いっさいなかった。

ただし、それは小学校一年生のときのことであり、三年生くらいになると状況は一変していた。女子生徒たちは闊達であるだけではなく、ある種の強権をほとんど常に発動しては、クラスをさまざまに仕切るまでになっていた。

女子生徒たちを拍手で迎えましようと言った先生は、その場を盛り上げるために、もつともたやすく思いつく常套手段である拍手を、ごく軽い気持ちで使ったのではなかったか、と僕は思う。現在の日本の全国津々浦々で、なにかの集会があればそこに女性の司会

者がいて、「それでは皆様、カタオカさんをお拍手でお迎えください」とか、「それでは皆様、カタオカさんにいま一度の盛大な拍手をお願いいたします」などと、常套句を駆使してその場のひとつひとつをかわしていく様子と、質的にはまったくおなじだったのではないか。

あっけなく煽られて、と言つていいかと思うが、一九四五年秋の小学校一年生の男の子たちは、笑顔で拍手して女の子たちを教室に迎えた。その拍手がどのような拍手だったら、その後の日本にとつてもつとも好ましかったか、六十年以上をへた後知恵として、いまの僕は次のように思う。いまこうして教室へ入って来て自分たちの隣にすわった女の子たちは、ひよつとしたら自分たちよりも賢い人たちかもしれないと、心の底から謙虚に思つてそのとおりに行動するための、民主主義の第一歩を我が身の上で確認する拍手だったら、なんと良かったことだろう。

俳句を肴に酒を飲む



新田啓造

(ジャーナリスト)

「俳句を肴に酒を飲みませんか」という不屈き極まりない一言から、私たちの句会が始まった。四谷荒木町の小料理屋である。

その店の常連で職種や経歴はまるで違うが気心が知れた仲間である。当然小料理屋の旦那にも声がかかる。

「えっ、俳句ですか。私はそんな高尚なものを作ったことはありません。おツクリだけで勘弁して下さいよ」と逃げると逃げる。飲んだ勢いというものは

恐ろしいもので、その夜のうちに句会の規約が成立してしまった。藤田湘子の「俳句入門」を読めば、それだけで入会資格あり。とにかく全員がずぶの素人で俳句など作ったことがない。さらに宗匠なしで句会を開こうというのだから無茶苦茶である。

「男ばっかりじゃあね、イロも欲しいよね」

ということでも小料理屋から歩いて三分のピアノバーへ。ママと常駐のピア

ノ弾きをゲット。あつという間に男性五名、女性五名のメンバーが決まってしまった。

東大法学部卒の酔っぱらいもいればカルチャーセンターの企画をしているキャリアアウーマンもいた。主旨が、酒の肴であるから俳句はどっちでもいいわけだが、それでは酒が旨くない。それなりの俳句が集まらないと面白くないのである。

二句持ち寄りで句会が開かれた。投句用紙、選句用紙、半紙、など型どおりものを準備。場所は小料理屋が休みの土曜日の昼下がりがりだった。

鮫鱈をさばく軍手の白さかな
霜降るや夜半の鴉のしやがれ声
つかの間のときめきありて冬紅葉

荒海の間に眼凝らす海鼠かな

旧き友席につくなりまず海鼠
迷句が続出した。選句がはじまり点が入り出すと緊張が走った。どっちでもいいとはいえず、自分の句に点が入らないと淋しいものである。

一段落したところで酒が解禁され、

座は盛り上がった。自分の句に点が入らないのは選句者が悪いと広言する者もいる。その日の鮫鱈鍋の味は人それぞれであったようだ。

一回の句会で味を占めたメンバーは吟行を兼ねて郊外によく出かけた。一泊句会である。伊香保温泉では徳富蘆花が「不如帰」を書いたといわれる旅館で句会を開いた。その折、自分たちの句会に名前をつけようということとなり、な、なんと「殿様倶楽部」という会の名称としては場違いの名がついてしまった。これには訳があり、その会で一等賞の得点を得た人が殿様となり、次回の句会で殿様が決まるまで殿と呼ばれる栄光をほしいままにできるきまりなのだ。

「近こう寄れ。苦しゅうないぞ」
殿になれば、えばつたもの。メンバーの女性をばべらせ、酒の酌をさせたりやりたい放題。女性が殿になると、姫様となりこちらも似たり寄ったり。
「へ、へーい、三太夫が心得てございます」

とばかり会の最長老が両手をつくと及んでは、宴は盛り上がるばかり。殿様倶楽部という会の名前も、それほど悪くないと思っていた。ところが、それが困ったことがあった。

小料理屋の旦那の故郷で句会を開いたときのことだ。群馬県の山の中であった。村長さんが旦那の同級生ということで、私たち殿様倶楽部十名が車で村に入ると準備がすべて整っていた。

村の俳句愛好者と合同句会という趣向なのだ。他流試合は初めて、それなりの緊張感もあった。さらにそこには取材の記者まで用意されていた。

「東京からお見えの皆さんの句会の名称は何とおっしゃるんですか」
「うっ、あつ、その、殿様、殿様倶楽部です」

小料理屋の旦那がしどろもどろに答える。

「いえ、その通称殿様倶楽部で、まだ正式な名前は決めてないんですよ」と、その場はしのいだものの赤面のいたりであった。しかし、その夜の句

会で最高点を獲得したのは小料理屋の旦那であった。

古寺に背山明るき竹の春 くら田
句の良し悪しが別として、東京組が

最高点を得たことは、面目が立ったというもの。旦那としては、故郷に錦を飾る結果となった。仕組んだわけではないが、この会は偶然がなせる吉兆がしばしばあった。長老が古希を迎えた句会では、長老が殿様となり、メンバーの一人がたまたま誕生日の日の句会では本人が殿様となったり、不思議な思いがしたものだ。

が、中には殿（姫様）に選ばれながら文句たらたらケースもあった。木曾の中仙道は妻籠宿での句会は、江戸時代から続く旅籠で行われた。上座にはなんと立派な仏壇があったのだ。

「どうしてあたしの時には後ろに仏壇があるのよ」
選ばれた姫はうらめしそうな声を上げた。あれから十年が過ぎようとしている。同じメンバーでもう一度、句会を開いてみたいと思っている。

ブルゲンランドの秋

さかもと ふ さ

(型絵染版画家、エディター
イラストレーター)

来年、日本、オーストリア交流一
四〇周年にあたりブルゲンランド州
の首都アイゼンシュタットで展覧会
をすることになり、今年は五月と十

月の二回ブルゲンランドを訪れた。
ブルゲンランドをテーマにしたカ
レンダーを作る話がまとまり、秋の
ブルゲンランドを取材した。



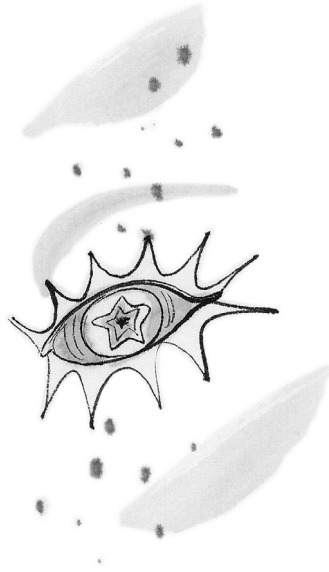
ブルゲンランド州はなだらかな丘陵地帯に葡萄畑が広がり、その丘の向こうに湖面が見える、世界遺産のステップ湖、ノージードラ湖である。葦が群生し、野鳥の保護区でもあり、海に恵まれない国のウィーン子達の夏のレジャーを楽しむ唯一の場所でもある。

この湖水にそって、コウノトリを保護している町ルストがある。林立する煙突の上に巣が作られていた。

わたしが訪れた十月にはコウノトリは巣立った後だった。また来年の夏にやってくるのだといっていた。コウノトリがくる町は平和の町だといわれている。

忘れてはならない、オースリアの中でもワインの生産地としても有名な州であり、ワインケラーが立ち並ぶ村が点在している。十月の中旬にきたときは葡萄の葉が黄色かったのが十一月初めに再び訪れたときは、葉は赤く色づいていた。葉の赤い色が濃くなっているのは冬の訪れが間近なのだ、案内人のオーストリア人が教えてくれた。

開瞳薬雑想



永岡 慶之助 (作家)

眼に違和感を覚えたが、しばらく捨ておいたら、原稿用紙のマス目が霞むようになり、これはいかんと、いささか慌てた。咄嗟に頭をよぎったのは、「白内障」の文字であり、手術の恐怖感であった。まことに意気地のない話だが、想像するだに怖じ気づき、大いに意気阻喪した次第である。

しかも悪いことに、懇意にしていた眼科医が亡くなったので、新規に眼科医院を捜さねばならない。見知らぬ医院とあって、いよいよ不安は膨れあがったものの、『大菩薩峠』の机籠之助のよう無明の世界をさまようのも困るから、意を決して黄色い電話帳を開いた。捜しだした眼科医院は、市の校外、

車で五分ほど、小高い丘陵の中腹にあって、道をへだてた下はサッカー場であった。試合のないそれは、森閑と静まり返っており、小ぢんまりとした医院は、プレートの「白内障手術」の文字だけが、いやに鮮明に大きく見えたことである。

受付で手続きをすませ、待合室の椅子に腰をおろし、改めてまわりを見廻すと診察を待つ患者が十人ほどいる。これは時間がかかるなど覚悟したところに、若い看護師さんがあらわれて、「カイドウ薬です」と言い、私の瞼を開け、薬液を点眼しながら、「五時間ほど……夕方までは眼が眩しいですよ」と付け加えた。

看護師さんの言った「カイドウ薬」が「開瞳薬」であることは、私にはすぐ理解ができた。私は診察の順番がくるまで、開瞳薬について考えつづけた。すると、かつて書いた「シーボルト事件」のあれこれが、するすると脳裏に甦った。

文政九年（一八二六）正月九日、長

崎出島を出発した和蘭商館長江戸参府の一行は、東行すること五十余日、行程およそ三百六十里。三月四日、ついに江戸日本橋本石町の長崎屋源右衛門方に投宿した。この長崎屋は、

「石町の鐘は和蘭陀まで聞え」

という川柳でも知られるように、江戸一番と称された、石町の鐘撞堂に間近に和蘭商館一行の定宿であった。

総勢五十七名中の花形は、商館長スケウルレルよりも、商館付医官の外科少佐シーボルトであった。六郷川を渡って、いよいよ江戸へ入るという大森宿に、薩摩侯島津重豪や中津侯奥平昌高が出迎え、中津侯などはシーボルトに対し、オランダ語で挨拶したほどである。

ともかく、ドクトル・シーボルトの名は広く知れ渡っており、品川宿では將軍家の侍医桂川甫賢が出迎え、シーボルトに小野蘭山の『花臺』を蘭訳したものを呈出するなど、まさにシーボルトこそ江戸参府の主役の観すらあった。

日本橋の長崎屋においても、来訪者はすべてシーボルトの面会者で、その中には幕府天文方高橋作左衛門がいて、美麗なる日本地図をシーボルトに贈った。高橋は浅草天文台にて、天体観測や地図の作成などにたずさわる中心人物であった。

また、江戸城西の丸の奥医師土生玄碩も来訪した一人である。眼科専門の玄碩は、開瞳薬の素晴らしい薬効を知るや、シーボルトに薬剤の伝授を願ったが許されず落胆した。

どうしても諦めきれぬ玄碩は、目を改めて登城の歸途、ふたたび長崎屋に立ち寄り、シーボルトに開瞳薬の伝授を願った。やはり難色を示したシーボルトの眸が、玄碩の着ている羽織の紋を視て、急に強い好奇心を覚えたようであった。と見てとった玄碩は、その場で羽織りを脱いでシーボルトに贈ったところ、シーボルトも開瞳薬の調剤を伝授した。シーボルトの好奇心をそそったのは、玄碩が將軍家から拝領した葵の紋であり、これが後日、思わぬ

大事に至ろうとは、夢にも玄碩は思わず、開瞳薬の調剤を知りえた欲びに胸を膨らませていた。事実、これにより日本における白内障の手術は、大いに進歩したとある。

災難は忘れた頃にやってくるというが、二年後の文政十一年九月十七日の夜半から翌朝にかけて、長崎地方を大暴風雨が襲い、和商船コレネリウス・ハウトマン号が座礁した。奉行所の役人が積荷を改めたところ、国禁の日本地図や葵紋の羽織が、シーボルトの膨大なコレクションの中から発見されて大騒ぎとなった。シーボルト事件の発端である。高橋作左衛門は流刑、土生玄碩は改易となった。

ところで私の診断は、「初期の白内障で、結膜炎」とのこと、小さな点眼薬を三個頂戴して帰宅した。まず結膜炎を治したら、次は土生玄碩が苦心した開瞳薬の御厄介になり、白内障治療のため、どうやらまた郊外の眼科病院を訪ねることになりそうである。

十一年目のピケ

六月だというのに真夏のごとくじりじりと暑い。日が高くなる前に散歩中のピケちゃんを水槽に戻すべくサンダル履きで外に出た。フェンス囲いの八畳程の庭は日照り続きで地面も固くなっている。三匹のわんこが自由に遊べるようにと作ったスペースだが、今ではミドリ亀のピケちゃんもその中で一緒に暮らし始めた。わさわさと短めの雑草が生い茂る先に石のような塊が見えた。いつものようにそれを両手で持ち上げようとして手が止まった。何かがおかしい。その場にへばりつくような「ここから一步も動きまへん」といった強い意志を漂わせている。よく見る



と後ろ足の下にぽっかりと丸い穴。なんだ穴に足を取られて困っていたのかと持ち上げて五センチ程前に置いてやっだが、即座に、巻き戻したようにズリズリとバックしてまた足を穴に突っ込んできた。しゃもじのような足で酢飯を作る時のように土を縦に切っている。深さ十センチ程の壺状の穴ができていた。ただならぬ気配に高なる胸を抑えつつ手を離して様子を見守ることにする。ピケちゃんは十一年前当時小学四年の長女が夏祭りで購入してきた。子供の手の平で散歩できる程のサイズでもちゃみみたいな子亀だった。金魚用の水槽に水を張って入れると器用に泳い

で時折ぶかあーっと顔を出す。針で二つ突いたような穴みたいな鼻で息を吸った。真ん中に線を引いた音符の「ド」の形をした目でポーツと宙を見ていたり、顔の両側のオレンジ色のラインを右に左に見せながらキョロキョロしたり、芸はないが愛嬌はたっぷりだった。粒々の「カメフード」を水面にバラバラ落としていくと、スーッと上がって来て一呼吸置いてから「あもつ」と食べる。日光浴の為に水槽ごと外に出すこともあったが、甲羅干し用の「島」に上陸していたらわんこに啗えられて危うく「骨ガム」代わりにされそうになったことがある。五匹の猫達にも油

山本千明
(ECC英会話講師)

断できず、少し散歩させていた折に「アイスホッケー」の球にされ、物の隙間に「ゴール」していたこともあった。これらの事故を回避すべく、結局洗面所の窓側を定位置とした「室内亀」となる。それから早十一年目。浴室のタイルの上で動中、誤って洗面器に入ったらスッポリはまって抜けにくい立派な亀さんになっていた。水槽も年々大きいものに変え、それでも狭くなるとプラスチックの衣装ケースに引越した。毎年寒くなると棒のような水中用電熱器で保温し越冬させていたのだが、昨年は何故か春になっても全く食欲が戻らない。紫外線不足かもしれないと思いつつ、娑婆世界に出してみる。犬猫集団もクンクン、ツンツンと寄っては来るがさすがに「遊ぶにはデカすぎる」と判断したようですぐに解散してしまった。案の定、自然環境は効果テキメン。一週間もしない内に「あもつあもつ」と吸い込むように食べてくれるようになっていった。そんなホッとした矢先である。ピケちゃんの身に今、何が起

きようとしているのか？穴の上に陣取ったピケちゃんの動きが止まる。目を凝らすとお尻の辺りからツルン！と白い物体が穴を目掛けて落ちてきた。子供の頃水族館で海亀の卵を触らせてもらった事がある。それはピンポン球のように丸くて弾力があつた。今、穴の中心ろりと納まった物は、真つ白な繭玉を両側から引き伸ばしたような楕円形で、鶏の卵二個分くらいな大きさだ。貝から出されたばかりの真珠のように艶々と輝いている。ピケちゃんは一つ生む度にサツサツと足で土を掛けそれが隠れる頃にまた一つ、また一つと次々と産卵をしていった。計八個。これだけの卵が甲羅に挟まれたお腹のどこにあつたのかとただ驚くばかりである。それにしても今まで卵を産みたいと思つた事は無かつたのか？土のある場所に出た瞬間「受胎告知」が聞こえてくるシステムなのか？謎だけである。さらに産卵はしたものの、元々が「シンゲルマザー」ピケちゃんの、卵達の運命やいかに？何も分からないまま三ヶ月

が過ぎた。記録的な小雨の夏。早明浦ダムの貯水率は限りなくゼロに近づいていく。庭の地面も焼け付くような日差しに晒されてコンクリートのようになく固まっていた。万が一孵化しても土が固すぎて地上に出られなかったのではないか？秋風が吹き始める頃、恐る恐る目印を付けた場所を掘り起こしてみた。周囲の土がカチカチなのにそこだけは不思議にホロホロと柔らかい。指だけで簡単に掘れてしまった。中から出て来た卵達は踏まれたピンポン玉のようにどれも一部がくしゃりと潰れてしまっている。やはり「告知」は受けても「マリア様」のようにはいかなかったようだ。「ミドリ亀は外来種だから増やさない方がいいよ」といったアドバイスもあつたが、個人的には親亀子亀に囲まれた「めでたい正月」とならなかったことにどこか小さな落胆を感じていた。昨年初の「出産」をして大人と認められたピケちゃんは今年、生まれて初めての「冬眠」をして水底で静かに春を待っている。